

農林水産省大臣官房長賞

『ようこそ、楽しい給食の時間へ！』

東京都板橋区立前野小学校 六年 木村 博之

六年生になり、小学校の給食生活も終わりだと思うととてもさみしいです。なぜかと言うと、ぼくの学校生活は給食に始まり給食に終わるくらいの心のウエイトを占めているからです。

ぼくは給食が苦手でした。小さい時から食べるのがおそく、時間内に食べられないのがプレッシャーで、給食の時間になると気が重くなっていました。しかし、食品ロスのニュースを見てとても悲しい気持ちになり、残すことは絶対にしたくないと思い、それがさらにプレッシャーでした。そんなぼくの気持ちを理解してくれて、先生や給食当番の友達は食べられる量に調整してくれました。そんなやさしさにどれほど感謝したことでしょう。給食は周りからの温かい思いやりを感じた小学校低学年時代でした。

「食べることは、生きること！」

母の口ぐせです。その影響で、四年生の夏休みの自由研究で食料自給率に取り組みました。日本の食料自給率が三十七%と低く、海外からの輸入にたよっていることに驚き、食生活について家族で話し合いました。結果、地産地消に取り組もうと、板橋区の農園を借りて、じやがいも・きゅうり・枝豆・大根・人参などをつくりました。土から耕し、肥料をまいて水やりをして作物をつくる。できた野菜はとてもおいしくて、感激しました。地産地消に興味を持ち調べると、区内農家の方の集まりである、板橋ふれあい農園会があることを知りました。そして、学校給食にも板橋ふれあい農園会の野菜が使われていることを知りました。早速、学校の給食献立を確認したら、ふれあい農園会の食材が書かれていました。新たな発見でした。

ぼくの住む板橋区は各学校に栄養士の先生がいて、それぞれオリジナルの献立になります。正直、好きな献立、嫌いな献立があります。そしてぼくは相変わらず食べるのがおそいので、量を少なくしてもらっています。六年生にもなってプレッシャーですが、食べることは楽しくなりました。農家の方、配達する方、献立を考えてくれる栄養士の先生、調理する方、配ぜんしてくれる友達・・・食というワードでつながっているからです。

これから入学してくる新一年生もきっとぼくのように食べるのがおそく、給食がプレッシャーになる子もいると思います。そのような子には、

「ようこそ、楽しい給食の時間へ！」

とやさしく声をかけるように、来年最上級生になる五年生に伝えようと思います。

六年間の小学校の給食生活、残り少なくなってきましたが、これまで関わってくださったたくさんの方々感謝し、楽しんでおいしく食べたいと思います。

給食で 心とお腹 ほっかほっか